

審査の結果の要旨

氏名 濱田秀行

本論文は、中等教育段階の国語科授業において、他者との交流を通して物語を読み深める過程を、バフチンの対話論と、ジュネットの物語論の系譜にもとづき、物語言説の叙法としての「焦点化」の様態に着目し、教室談話の分析を通して明らかにすることを目的とした研究である。全体は5部8章から構成される。

第Ⅰ部第1章では、物語の理解過程に関して、近代小説テキストを対象とするテキスト分析に関する文学研究、物語の理解過程に関する認知心理学研究、物語を読む能力の発達の系統性を論じた国語科教育研究を概括し、物語言説における出来事に対する焦点化の様態に基づく分析という観点を導出し、5つの研究課題を提示し、第2章ではその具体的な、国語授業における研究方法を論じている。

第Ⅱ部では、中学校国語授業25時間を対象とし、他者との対話で読みを深める過程を記述検討している。第3章では、小グループ内で生徒が物語に対する問いと探究を進める過程を、焦点化/非焦点化、焦点の移動と出来事の筋立ての理解との関連を質的に分析し、生徒間の対話により焦点の移動や転換が生じること、および生徒の個人内においても焦点化やその移動が生じること、その際に物語言説における音声の要素に注目することが複数の登場人物の意識をふまえた意味の生成につながることを明らかにしている。また第4章では、登場人物に対し異なる焦点化を行っている複数生徒間の発話連鎖を検討し、生徒発話の焦点化は、物語の語り、他生徒の発話、登場人物への感情的反応の相互作用の中で形成され、感情的反応に違いのある発話が対置されることで読みが深まることを示している。

第Ⅲ部では、高等学校12時間の授業を分析対象とし、協働的に読み深める授業内での生徒の自己内対話過程を検討している。第5章では、主要な登場人物への共感の程度が異なる生徒間での対話事例とワークシートの分析を通して、他者の読みを取り込む際に行われる自己内対話が他者の読みを再文脈化するために新たな文脈を創造したり自分の声で編集する創造的側面がある一方で、生徒自らの解釈を部分的に喪失していく面があることを示している。また第6章では、授業談話と授業終了時の振り返り記録との関連を分析し、小グループと教室全体での対話という異なる形態の移行によって読みに対する著者性の意識が形成されることが生徒に能動的な聴き方を促し、能動的に聴いていた生徒にとっては振り返りの学習活動が新たな解釈を生成する時間となることを示している。第7章では、単元を通してのIRE発話連鎖分析から教師の問いが真正な質問として機能する場合に、教室の権威構造が転換しうる可能性を持つことを、事例として明らかにしている。

そして第Ⅳ部第8章では、上記一連の研究を踏まえ、中等教育段階での物語を読み深める授業過程の特徴をまとめ、本研究の意義と今後の理論的、方法論的課題を総括している。

本論文は、物語言説の分析概念である「焦点化」の概念を物語の読みの授業過程に適用し、単元を通じた教室談話過程を社会文化的アプローチの立場から質的に分析した論文である。この点で独自性が高く、国語科教育における物語の授業分析や、教室談話研究に新たな視座を示したと評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあると判断された。